

令和5年度 山形城北高等学校 修了式 式辞 (令和6年3月25日)

2月、3月は慌ただしく、気がつく今日は令和5年度最後の登校日となりました。3年生が卒業したこともあり、なんとなく寂しく、新入生の入学が待ち望まれるところですが、2週間あまり経つと、今年は421名の新入生が入学します。近年、募集定員を大きく上回っていますが、これも皆さんの様々な活躍があつてのことと感謝します。

今日は3月1日に行われた卒業式の話から始めます。

コロナ禍の卒業式では、祝辞をなくして短縮したり、保護者の参加を一人に限ったりと、何かしらの制限を設けながら実施してきましたが、今年は4年ぶりにフルバージョンでの開催となりました。卒業生を代表して、野球部の豊川零惟君が答辞を述べたのですが、コロナを通して考えたことや勉強と部活動との両立の話、将来の夢など、本当に真っすぐで心打つ内容でした。普通科ながら第一志望であった岩手大学農学部に合格するなど、本当に良く努力して、学業優秀者表彰も受賞した先輩です。

卒業式が終わった後、保護者の方々から卒業式や3年間を振り返つての感想をアンケートでいただいたのですが、その中にこんなメッセージがありました。

○ コロナの制限もなく、温かい雰囲気の中で卒業式に参加することができました。校長先生の言葉は生きる意味を改めて考え、子どもたちにもしっかりと伝えてくださったことに感謝の気持ちでいっぱいになりました。また、卒業生代表の言葉も、在校生の送辞も涙、涙でした。本当に素晴らしい卒業式でした。

私の式辞は、この3年の間に、ロシア・ウクライナ戦争やイスラエル・ハマスの戦争が起こったことを踏まえ、戦争について話をしようと考えていたのですが、ちょうど『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』という映画を観て感動したので、その内容をベースにした話でした。

この映画は、昨年12月に公開され、若い人たちの間で感動の声が広がり、大ヒットした作品です。高校生役を演じたのが福原遥さんと、特攻隊員が水上恒司(みずかみこうし)さんのダブル主演の映画です。

親にも学校にも不満を抱えている高校生の百合は、ある日、進路をめぐって母親と大喧嘩し、近所の防空壕跡で一夜を過ごすところから物語は始まります。目を覚ますと、そこは1945年夏、戦時中の日本でした。制服を着たままタイムスリップした百合は、彰という成年に出会います。真っすぐな百合は幾度となくトラブルを起こしますが、そのたびに彰に助けられ、しだいにその誠実さや優しさに惹かれていきます。ところが、彼は出撃を待つ特攻隊員だったのです。

私はこの映画を二度観たのですが、一度目は霞城セントラルにあるソラリスで、お客さんは高校生を含め、駅を利用している若者がたくさんいました。印象的だったのは、映画が終わってもすぐに立ち去ろうとせず、目を真っ赤にして呆然と佇んでいる人が多かったように思います。

2度目は、卒業式の式辞に映画の話を書こうと決めたあと、映画の最後に彰が語る言葉が何だったか知りたくなくて、今度はムービーオンという映画館に足を運びました。こちらは車が無いと行きにくい場所にあるため、観客は社会人や高齢者が多かったように思います。そういうこともあつてか、映画が始まるとすぐに、人目をはばからず、涙や鼻水を拭う人たちがたくさんいました。

私が映画を観てどう感じたか、卒業式の式辞でどう伝えたかは今日ここで話すことはしません。興味ある人は本校のHPで読んでください。

さて、先ほど卒業式の後に保護者アンケートをとったと話しましたが、その中にたいへん興味深いものが2つありました。

○ 校長先生のお話は入学式の時の桜についても、この度の卒業式のお話も大変心に響きました。大事な節目でお話を聞く事ができ、改めて気持ちが引き締められました。

○ 校長先生のソメイヨシノの話が入学式の時からこころに残り、心がけをしてきました。卒業式にもお話ししてもらい感謝します。

というメッセージです。私が3年前の入学式で話をしたことを、ずっと記憶に留めていてくれたことに大変感銘を受けました。

昨年の入学式では‘莓狩りの莓はなぜ美味しいのか’という話をし、2年前の入学式では‘ファーストペンギン’の話をしました。そして、3年前の入学式では、よく公園などで見かける桜‘ソメイヨシノ’について話をしたのでした。次のような内容です。

ソメイヨシノは江戸時代末期にオオシマザクラとエドヒガンという2種類の桜を人工的に交配させて誕生しました。その美しさが知れ渡り、接ぎ木によって全国あちこちに植えられました。接ぎ木とは同じ遺伝子を持つ個体を複製すること、つまりクローンを作ることに他なりません。今では全国に100万本以上あると言われるソメイヨシノは、一本の木からクローン繁殖で増えたものなのです。同じ遺伝子であるために、気象条件がそろえば、一斉に花が咲き、一斉に散るわけです。

しかし、クローンには大きな問題点があります。隣り合うソメイヨシノは、固体は異なっているにもかかわらずクローンであるため、双方から伸びた枝は自分自身であると錯覚し、隣からの枝を支障なく自分の樹の中に受け入れてしまうのです。そして、やがて重なり合った枝は日照不足となり、徐々に枝枯れを起こし、樹木が衰え始めます。

一方、人は親、兄弟でも異なる遺伝子を持ちます。しかしながら、幼い頃は自分と他者の区別がつかないため、人の物を勝手に借りたり、ベタベタと触れ合ったりします。まさにソメイヨシノ状態です。成長とともに自我の確立が始まると、自分と他者との違いを認識できるようになり、人と接するときは一定の距離を取る必要があることを覚えます。

そして、自分を客観的に見つめることができるようになり、自分らしさとは何なのか、自分の生きがいとは何のかなど、人生の指針を見つける時期 – それが、まさに中学、高校と続く青年期なのです。当然のことですが、自分のできないことを認識し始めるので、思い悩む時期でもあります。裏を返せば、悩むのは成長の証とも言えます。

人はクローンではありませんから、一人一人の興味や関心は異なりますし、同じ言葉で傷つく人もいれば、つかない人もいます。すなわち、多様性にあふれる存在なのです。そして、誰にとっても一番大切なのは命ですが、その次に大切なものとなると、スポーツだったり、音楽だったり、あるいは将来の夢の実現だったり、一人一人異なります。命の次に大切なものが違うわけですから、他の人が大切にしているものにも寛容でなければなりません。

いかがでしょうか。2年生になる今、3年生になろうとしている今、自我の確立に向けもがき苦しんでいるでしょうか。映画『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』の最後のシーンは、「これからの尊い未来を精一杯生きてください。」という彰の言葉で終わります。ぜひぜひ、残りの貴重な高校生活を精一杯生きてほしいと思います。